

海外養殖魚研究会報

発行：海外養殖魚研究会

連絡先 〒171 東京都豊島区南池袋
3-15-13 前田ビル205号
㈱国際水産技術開発内
TEL 03-982-7139

No.10. May. 1980

中11回海外養殖魚研究会が、4月19日(14:00~17:00)(株)OAFIC
会議室で開催されました。出席者は下記の通りでした。

加藤 竹一郎	(財) 海外漁業協力財団
増尾 致和	"
横川 次寛	"
深尾 浩	(株) OAFIC
座間味 真	(株) 国際水産技術開発
池上 宏	"

[テーマ] ラオスにおける淡水養殖開発の経験 増尾比

- アメリカの国際開発局がラオスの農業開発プロジェクトを組み、そのうち淡水養殖の部分を US Consultant という会社に委託した。この会社との契約で、1967年11月から1975年6月まで、淡水養殖の技術指導を行なった。このプロジェクトには、日本人は計4人派遣された。
- このプロジェクトはビエンチャンで1965年から始まっていたが、これ以前にラオスには養魚というものは全く存在しなかった。
- まずルアンパбанに派遣され、1967年11月から共産軍が侵入してくる1971年4月までそこで養魚技術指導を行ない、その後1973年5月までは南部のバクセに派遣された。1973年にはラオス領の半分はパテト・ラオの占領するところとなり、サヤグリというところで難民救済のため水田養魚用のコイ、ティラピア、キッシング、グラム三種苗を生産する7化

場をつくる仕事を1974年2月までやった。以後、帰国までタングムーというところにメオ族難民用のフ化場をつくる仕事に従事した。

- 。 タングムーのフ化場は、周辺住民の魚消費量を20kg/年/人として、計画した。300㎡の種苗生産池8池、フ化池、研修センター、倉庫、親魚池、産卵地をつくり、コイおよびティラピアの種苗生産を行なった。種苗は周辺難民部落にヘリコプターで配布された。巻魚法としては農民が庭先の池で魚を飼育し、欲しい時に取り場げるといような方式のものを考えた。フ化場への水の供給量は1~1.5トン/秒であった。このフ化場で10万~15万尾/月の種苗を生産した。
- 。 ティラピア親魚池は500㎡で、二に300尾を収容した。
- 。 青子までの歩止まりは15%位であった。
- 。 パクセでは害敵による被害が多く巻殖がうまくいかぬため、周辺農民からの種苗の需要がなく、成魚養成までやることとなった。雑草40%に米ぬか等を加えた餌で、10ヶ月間に150gに成長させ出荷した。
- 。 害敵としては、マツモムシ (Back swimmer)、ヘビ (water snake)、カエル、カタヤシ (mosquito fish)、ヤゴ、ゲンゴロウ、池壁に穴を開けるネズミなどがある。魚病は余りないが、イカリムシが時々として大発生する。
- 。 餌としては、アメリカからの余剰農産物のうち人間の食用とならぬコーン・ミール、地元でできる米ヌカ、青子用にはピーナツ・ケーキ、白アリの幼虫なども使用した。キャッサバは配合飼料のバインダーとして有効。
- 。 施肥には水牛のフン、鶏フン、羊フン、馬フンなどが良い。プランクトンの発生は鶏フンが一番良い。青子を入れて80~100g位までは池のすみこみに数ヶ所、牛フン、泥、枯草などを重ねこつき固めて施肥すれば無投餌で飼育できる。

- 。 途上国で養殖開発を行なう場合には、①相手国の要望が過大になりがちであるが、消費量などから考えて、適正規模に国執可べきである。
- ②かんがい用水を使う場合には、農民との間に水の配分についてあらかじめきちっとした取り決めをしておく必要がある。
- ③餌の供給に関し、慎重に配慮可す。
- ④害敵防除法を開発可す。などの事項が重要である。